

---

# Season

田中 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Season

### 【コード】

N4929F

### 【作者名】

田中 遼

### 【あらすじ】

季節の風が吹く。

小学五年生の翔太と華は、初めて訪れた雪景色の中で出逢い、透き通るような好意を抱いた。その、恋と呼ぶには早すぎる二人の想いが、二人の回りの少年、少女の心にほんの少しだけざわめきを広げていく。その一続きの季節のこと。

誰もが知っていて、忘れかけてしまっている大切な気持ちを、季節の風に乗せてお送りします。

## 雪の精

少年は一人、空を見上げていた。

最初は立ったまま上を向いていたのだが、楽な姿勢へ楽な姿勢へと体が動いて、今は仰向けに寝転んでいる。

空は全くの灰色で、太陽を浴びていない大地は痛いような冷気に包まれていた。

そこに白の結晶というべききれいな粒が、ハラリ、ハラリと舞う。

彼はそれをじっと見つめている。

初めて見る大きさの雪とその静けさに、瞬きさえも忘れていた。

そう、辺りは

彼の住む大きな街と違って

限りなく静

寂に近かった。

時たま遠くから、鳥の羽音や鳴き声、木や屋根から雪の塊が落ちる音が聞こえてくるぐらいで、全てが沈黙している。

少年はゆっくりと冷気を吸い込んでから目をとじ、雪の積もる音を聞き取るうとした。

息を殺し、全神経を張り詰めて。

何も聞こえない。

彼は満足げに息を吐き出し、目を開けた。

瞬間、彼はぎょっとして身を強張らせる。

何の音もしなかったにも関わらず、一人の女の子が彼の視界に現れ、彼を上から覗き込んでいたのだ。

彼は目をまん丸にして、少女の視線を受け止めている。二人とも瞬きもせず見つめ合った。

しばらく経って、少女は口元を覆っていたマフラーを手で引き下ろした。

息が白くかすれて、すうっととけていく。

彼女の声が囁くような調子で問いかけた。

「……………何してるの……………？」

苦しい。

少年は自分の呼吸が止まっていることに気づき、「ぶはぁ」と息を吐き出した。

その声は彼が思ったより大きく響き、少年は慌てて口を押さえて飛び起きた。

心臓の音がとどろいている。

肩越しに振り返ると、少女は身じろぎもせず、じっと待っていた。

少女は雪のように白い上着を着ていて、帽子やマフラー、手袋、ズボンも同じように真っ白である。

透き通るような白い肌の中、うっすらと赤くなっている頬と鼻の頭、それに黒々と輝いている目がふわりと浮かんでいた。

息を呑むほど綺麗な少女の顔立ちに、少年は見とれてしまいそうになる。

少年は目をこすり、少女が本当に存在していることを確認した。今まで、夢の中であっても、こんな子を見たことはなかった。彼は一瞬本気で、少女のことを妖精だと思った。

妖精。

それも雪の精だ。

とても人間の女の子とは思えなかった。

## 何かのはじまる声

しかし、じっと見つめ続けていても、少女の存在が揺らぐ気配はなかった。

少年が少女の足元に目をやると、彼女がしっかりと歩いてきたらしい跡もしっかり残っている。

彼は少女の目を再び見つめる。

彼女はまだ待っていた。

少年はゆっくりと口元から手を下ろし、鼻から静かに息を吸い込み、ゴクリと唾を飲み込み、心臓の音を感じながら、

「雪を……見てたんだ」

と小さな声で言った。少女はクスツと笑った。

「目をつぶって？」

少年は治まるどころかささらにひどくなる鼓動の高鳴りに戸惑いながら頷いた。

「……うん」

少女は微笑んだまま、わずかに首を傾げた。

「おもしろい……？」

少年は何かして静寂を保とうとしているような静かな声で言う。

「ううん。ただ、すごくきれい」

少女は肩越しに振り向き、空を見た。

雪は降り続けている。

音を吸い込み、色を塗り消し、そして自らは優雅な舞を繰り広げながら。

静まり返った舞台の上で、少年は少女を見つめ続けている。

その内側で誰にも気付かれないほど静かに、それでいて鳴り響くフアンファーレのようにはつきりと、そして途方もなく複雑で、しかも限りなく純粹な何かが芽吹こうとしていた。

彼は確かにその始まりを感じていたのだが、その名前を少年はまだ、知らない。

少女はしばらくそのまま佇んでいたが、今空から舞い降りてきている雪のように、不意にふわりと少年に向き直った。

微かな微笑を浮かべたその姿に、少年は呆然としながら見入ってしまっている。

「……………一緒に見ていい?」



少女の問いかけに少年は一瞬動きを止める。  
しかし程なく、大切な何かを扱うときのような慎重さでコクリと頷いた。

「……うん」

「ありがとう」

少女は少年に笑いかけ、彼に近付いてくる。

「ギユ、ギユ」と彼女の足元で雪が鳴く。

少年が座ったままで見つめ続けていると、少女は彼の横に勢い良く寝転がった。

彼女の倒れこむ「ボスン」という音を聞き、彼女の身体にそって出来た雪のへこみを見て、少年はまた少しだけ安心する。

「……君、名前は？」

少女はふっと息をついて答えた。

「華。君は？」

華は顔を少年のほうに向けた。

少年は咄嗟に身をかわすように視線を空に戻した。

「……麻地翔太」

華はニカッと歯を見せて笑った。

「翔太、だね。はじめまして」

翔太はまた横目で華を見ると、「ボスン」と後ろに倒れこんだ。

そして何か居心地悪そうに

「……………はじめまして」

と呟く。

華はその横顔を見つめ、ちょっとだけ微笑んだ後、また雪の舞に目をやった。

背中からじわじわと冷たさが迫ってくる。

しかし二人は、そんなことには気にも留めず、ただ、舞い落ちる雪たちを見つめていた。

## 少女の名前

「……………えっと……………」

翔太は迷っていた。

華は「華」としか教えなかったが、そう呼びかけるのが彼には躊躇われた。

彼女はニツと笑って翔太に言った。

「白井さん」ってよく呼ばれるけど、名字で呼ばれるのあんまり好きじゃないんだ」

「……………なんで？」

「なんとなく」

答えた後、華はじつと翔太を見つめ、彼を待った。

翔太はその視線に気付き、散々迷った挙句、微かに眉間にしわを寄せて、言いにくそうに言った。

「じゃあ……………華……………ちゃん？」

翔太の窮屈そうな言い方に、華はクスクス笑った。

「わざわざ「ちゃん」付けにしなくていいよ」

翔太は少しだけ唇を尖らせた。

そちらのほうが高ハードルが高く思えたのだ。

華はニコニコしながら翔太を待っている。

翔太はそれをちらりと見た後、目を伏せ、小さく呟くように言った。

「……じゃ、華」

翔太はすぐに目を上げ、顔を華の方に向けた。

とはいえ視線は彼女から逸らしている。

華はそれでまた微笑んだが、今度は何も言わなかった。

翔太は言いにくそうに尋ねる。

「……いくつ？」

「5年生」

華の満面の笑みを浮かべた。

それを見た翔太は、思わず笑ってしまったが、華が「お」っという表情をするとすぐ、その笑顔を引っ込め、また空を見る。

華は「おっと」と心の中で呟いた。

(……慣れ慣れしかなかったかなあ。それとも、あんまり話しかけないほうが良い……?)

それで指のとげを抜くかのように慎重にタイミングを測って質問を返した。

「翔太は？」

華の心配をよそに、翔太は彼女に向き直り、くすぐったそうにニコリした。

「同じ」

そして彼と、内心ホツと息をついた華が顔を見合わせる。

二人は恥ずかしそうに頬を染め、お互いに微笑みを返した。

二人が空に向き直ると、また、静寂が訪れた。

## 心の中

「ねえ」

しばらくして華が問い掛けた。

「家はどこ？ この辺なんでしょ？」

翔太は首を横に振った。

「東京。今は父さん母さんの友達の家に来てるだけ」

「……そう……」

華は内心肩を落としたが、それをなるべく表には出さないようにしていた。

「いつ帰るの？」

「明日」

また華は心の中を隠そうとしたが、今度の方が難しかった。

翔太は何気ない口調で尋ねる。

「華はこの辺に住んでるの？」

「今は」

「……今は？」

翔太の問いかけに、華は少しだけ諦めたような笑みを浮かべた。

「よく引越すんだ。お父さんの「再出発」のたびに

「ふーん」

翔太は彼女の方に顔を向け、じっと見てから言った。

「もしかして、来たばっか？」

言い当たられた華は目を丸くした。

「え、なんで？」

翔太は華の服を指差す。

「だって、それ、全部新品っぽいんだもん」

華は自分の服を見下ろし、困ったような顔になる。

確かにその通りだったが、普通、ちよつと見ただけで気付けるものではない。

「……すごいね。よく見てる」

翔太は照れたように笑った。

「それに、俺がここに住んでないって言った時、なんかがっかりしてたでしょ？」

彼の無邪気な言葉に、華は少しだけ息が詰まった。彼女はそれをとっさに隠そうとしたが、まったく上手くいかなかった。

彼女の息を呑む声が、静寂に響く。

翔太に振り返られた華は小さく咳払いをした。

それでも翔太は彼女をじっと見ている。

「……よく見てるね」

華はしぼり出すように咳いた後、たまった息を一気に吐き出した。息は冷気に触れて一瞬白くなり、手に落ちた雪のように溶けていく。

翔太はしばらく彼女の横顔を見ていたが、それ以上、何も言わずに空に向き直った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4929f/>

---

Season

2012年1月12日01時48分発行